

放射能と想像力

芹沢 清実

子どもの本と隣接する領域——マンガ、アニメ、映画で、「核」や「放射能」はどのように扱われ、あるいは、直接語られないまでも影を落としていたのか。具体的な作品を紹介し、そこにみられる意識のありようをさぐる、というのが、ここで与えられた課題です。まずはテーマの大きさにおののくとともに、この問題に関して、ふたつの相反することを感じます。

ひとつは、3・11以前のわたしたちに「見えなかったこと」と、あるいは「見ようとしなかったこと」があったのではないか、ということ。原発依存大国としての日本の繁栄が無垢なものではなく、原爆投下と核実験による被害の忘却と、一部の犠牲のもとに成り立っていたことについて多くの論が出て——高橋哲哉『犠牲のシステム福島・沖繩』（集英社新書）や大澤真幸『夢よりも深い覚醒へ——3・11後の哲学』（岩波新書）など——日本社会のシステム全体を問うことが構成員すべてに求められていると痛感させられます。「おまかせ民主主義」ではないけない、という自省は、原子力やエネルギーについて知る／伝えることが子ども文

化にも必要だという課題につながります。

さて、冒頭の課題をめぐって感じる、もうひとつのことは、3・11後の光景に「これは見たことがある」と感じさせるものが少なくなかったことです。

防護服を着た人影と汚染地域の遮断や、権力自らが作りだした破局を糊塗するプロバガンダ（浦沢直樹『20世紀少年』。被災後に都市機能を移転して続けられる市民生活や、電源消失のネットワークによる補完（アニメ『新世紀エヴァンゲリオン』。じつは「核」の影が見え隠れする破滅後の世界は、『風の谷のナウシカ』『AKIRA』など日本アニメを代表するマスターピースはもとより、九〇年代以降もメジャーなマンガ・アニメに描かれてきました。

つまり「見えなかった」けれど「見たことがあった」わけで、ここを問題にしているのが、被災後いちはやくまとめられた川村湊『原発と原爆——「核」の戦後精神史』（河出ブックス 二〇一一年八月）。「核」をめぐる映画やマンガ、アニメ、ミステリーなどを、『鉄腕アトム』『はだしのゲン』はもちろん、広範に網羅して読みごたえある一冊です。